The Japanese Society of Pharmacognosy

生 薬 学 雑 誌
Shoyakugaku Zasshi
36(3), 216～221 (1982)

貝歯の生薬学的研究（第1報）
貝子および紫貝の本草文献学的検討[1)]

浜田善利[2a)]，改原由紀子[2a)]，村上誠慤[2a)]，難波恒雄[2b)]
熊本大学薬学部[2a)]，富山医科薬科大学和漢薬研究所[2b)]

Pharmacognostical Studies on "Beichi (貝歯)" (1)
Historical and Herbological Investigations on "Beizi (貝子)" and "Zibei (紫貝)"[1)]

Toshiyuki Hamada,[2a)] Yukiko Kaihara,[2a)] Nobuyoshi Murakai[2a)] and Tsuneo Namba[2b)]

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kumamoto University,[2a)] Research Institute for Wakan-yahu, Toyama Medical and Pharmaceutical University[2b)]

(Received February 4, 1982)

"Beizi (貝子)" and "Zibei (紫貝)" are molluscan drugs used as a vision clarifier and as an anti-inflammatory agent in China and Japan. "Beizi," which is also called "Beichi (貝歯)," is described in "Shen Nong Ben Cao Jing (神農本草経)" and "Zibei," which is often called "Yaluo (砑螺)," is described in "Xin Xiu Ben Cao (新修本草)." Later, "Beizi" and "Zibei" were called "Baibeichi (白貝歯)" and "Zibeichi (紫貝歯)" respectively. Today both of these crude drugs are generally called by the name of "Beichi."

"Beizi" (meaning "small shells") is described as being white in colour with a tortoise-like swollen shell-dorsal side and with two lip-shaped margins with many teeth on the ventral side (hence these shells were called "Beichi"). These descriptions suggest that they are small cowries.

"Zibei" (meaning "violet shells") are large white shells with many violet spots on them. In old days, in China, painters used these shells for polishing the surfaces of their work and hence those shells were called "Yaluo." These descriptions suggest that they are large cowries.

The illustrations in such old Chinese literatures, especially those in "Ben Cao Yuan Shi (本草原始)," suggest that "Beizi" shells are those of either of the two mollusks belonging to family Cypraeidae, i.e. *Monetaria* (*Monetaria*) *moneta* (L.) and *M.* (*Ornamentaria*) *annulus* (L). "Zibei" shells are presumably the shells of *Cypraea tigirs* L., Cypraeidae.

貝子は『神農本草経』の下品に初めて収載された貝類生薬で，基源動物は現在の市場品から，海産軟体動物，腹足類のタカラガイ科に属する巻貝である．一方，紫貝は『新修本草』に初めて収載されたもので，この基源動物もまたタカラガイ科の巻貝である．この貝子と紫貝は，歴史的には区別して使いわけられて来たものであるが，ともによく似た貝類で，現在では双方を合わせて貝歯の名称で，同じように用いられることもある．貝子およびに紫貝ついて，日本では古くは単にタカラガイとし，種名はまだ詳しくは考定されていない．一方，香港市場品の中には，タカラガイ科以外の貝の混入もみられる．本報では貝子および紫貝について，本草文献学的に推定される貝の種類を検討した．

I. 名 称

貝子は『神農本草経』[3)] の下品に収載された正名であり，同書では一名を貝歯という．『日華子本草』[4a)] では別に白

1) 日本薬学会第101年会（1981年4月，熊本）にて発表．
2) Location: a) *Ōehon-machi, Kumamoto, 862*; b) *2630 Sugitani, Toyama, 930-01.*
3) 清顧観光重輯，"神農本草経"，下品，人民衛生出版社，北京，第1版第5次印刷，1958，p. 101.
4) a)宋唐慎微撰，"重修政和経史證類備用本草"，巻22，人民衛生出版社影印，北京，第1版第1次印刷，1957，p. 449; b)同上，巻21，p. 435.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

貝の名があり，『本草綱目』[5a] ではさらに海蚆の名が記録されている．なお現代は，『中薬大辞典』[6a] において，異名の中に白海蚆（簡便単方）および白貝歯（薬材資料彙編）が収載されている．これらはいずれも，正名としては貝子を用いている．

紫貝は唐の『新修本草』[7a] に収載されたのが最初である．以後も紫貝として記録されたが，『日華子本草』[4b] では別に砺螺の名があり，『本草綱目』[5b] で別名として文貝および砺螺を記している．現代の『中薬大辞典』[6b] ではこの他に紫貝歯（中国医学大辞典）の名がある．一方，現在においては，この紫貝歯の名称のみを収載するものがあって，『中華人民共和国薬典』[8] などでは，正名として紫貝歯を用いている．

貝歯は『神農本草経』以来，歴代の本草書では貝子の一名であったが，現代では貝子を白貝歯，紫貝を紫貝歯と称することが多く，さらには『中薬志』[9] のように，白貝歯と紫貝歯を合わせて，貝歯と総称することがある．また『薬材学』[10] および『中薬材手冊』[11] においては，紫貝歯の別名として貝歯の名がある．即ち，貝歯には貝子の一名としての名称，白貝歯と紫貝歯を合わせた総称としての名称および紫貝歯の別名としての名称がある．貝子と紫貝の名称の変遷を Table I に示した．

II. 形態，生態および分布

貝子の形態に関する記述では，先ず『本草経集注』[12] に「此是今小小貝子」とあって，小さな貝であることを示している．さらに，『図経本草』[4a] には「貝類之最小者，又若蝸状」とあって，「潔白如魚歯故一名貝歯」と説明している．『本草衍義』[15a] では「亦如紫貝但長寸余故曰貝子」と，紫貝との比較において述べ，李時珍はさらに詳しく『本

Table I. Changes of the Names of "Beizi" and "Zibei" in Chinese Literatures

書　名	貝　子	紫　貝
神農本草経	貝子，一名貝歯	
本草経集注[12]	貝子，一名貝歯	
新修本草[7a,b]	貝子，一名貝歯	紫貝
千金翼方[13a,b]	貝子，一名貝歯	紫貝
大観本草[14a,b]	貝子，一名貝歯，白貝(日華)	紫貝，砺螺(日華)
本草衍義[15a,b]	貝子，貝歯	紫貝
政和本草	貝子，一名貝歯，白貝(日華)	紫貝，砺螺(日華)
本草品彙精要[16a,b]	貝子，〔名〕貝歯，白貝	紫貝，〔名〕砺螺
本草綱目	貝子，〔釈名〕貝歯，白貝，海蚆	紫貝，〔釈名〕文貝，砺螺
本草原始[17]	貝子，一名貝歯，俗称海貝	
本草求真[18]		紫貝
中国医学大辞典[19a,b]	貝子，貝歯，白貝	紫貝，紫貝歯，紫貝螺
中国薬学大辞典[20a,b]	貝子，別名貝歯，白貝，海蚆	紫貝，別名文貝，砺螺，紫貝歯，紫貝螺
中薬大辞典	貝子，別名貝歯，白貝，白海蚆，白貝歯	紫貝，別名文貝，砺螺，紫貝歯
中薬材手冊		紫貝歯，別名紫貝，貝歯
中華人民共和国薬典		紫貝歯

5) a)明李時珍撰，"本草綱目"，平装6冊本，巻46，商務印書館，香港，2版，1967，6(23)，p. 37; b)同上，p. 39.
6) a)江蘇新医学院編，"中薬大辞典"，上冊，上海人民出版社，上海，第1版第1次印刷，1977，p. 407; b)同上，下冊，p. 2341.
7) a)岡西為人，"重輯新修本草"，巻16，11ウ，学術図書刊行会，川西市，1978，p. 99; b)同上，18オ，p. 102.
8) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編，"中華人民共和国薬典"，一部，1977年版，人民衛生出版社，北京，第1版第1次印刷，1978，p. 579.
9) 中国医学科学院薬物研究所等編，"中薬志"，第4冊，人民衛生出版社，北京，第1版第1次印刷，1961，p. 38, pl. 4.
10) 南京薬学院編，"薬材学"，劭華文化服務社，p. 1208.
11) "中薬材手冊"，香港新文書店，香港，p. 523.
12) 陶弘景校注，小嶋尚真，森立之ら重輯，"本草経集注"，巻6，46オ，ウ，南大阪印刷センター原寸影印，大阪，1973.
13) a)唐孫思邈著，"千金翼方"，巻4，人民衛生出版社影印，北京，第1版第1次印刷，1955，p. 49; b)同上，p. 48.
14) a)宋唐慎微等編著，岡西為人，難波恒雄，李煥燊考訂，"経史證類大観本草"，巻22，20オ，国立中国医薬研究所，台北，1971，p. 501; b)同上，巻21，25ウ，p. 489.
15) a)寇宗奭撰，"本草衍義"，宣統2年武昌医館重刊元本附校記，巻17，11オ; b)同上，巻17，7オ.
16) a)明劉文泰等纂，"本草品彙精要"，中冊，人民衛生出版社，北京，第1版第1次印刷，p. 749; b)同上，p. 721.

NII-Electronic Library Service

草綱目』[5a] で「貝子，小白貝也，大如拇指，頂長寸許，背腹皆白，諸貝皆背隆如亀背，腹下両開相向，有歯刻如魚歯，其中肉如蝸蚪，而有首尾」と説明している．『本草原始』[17] では，さらにこれをうけて「貝腹下潔白，両開相向如魚歯故一名貝歯」と記している．

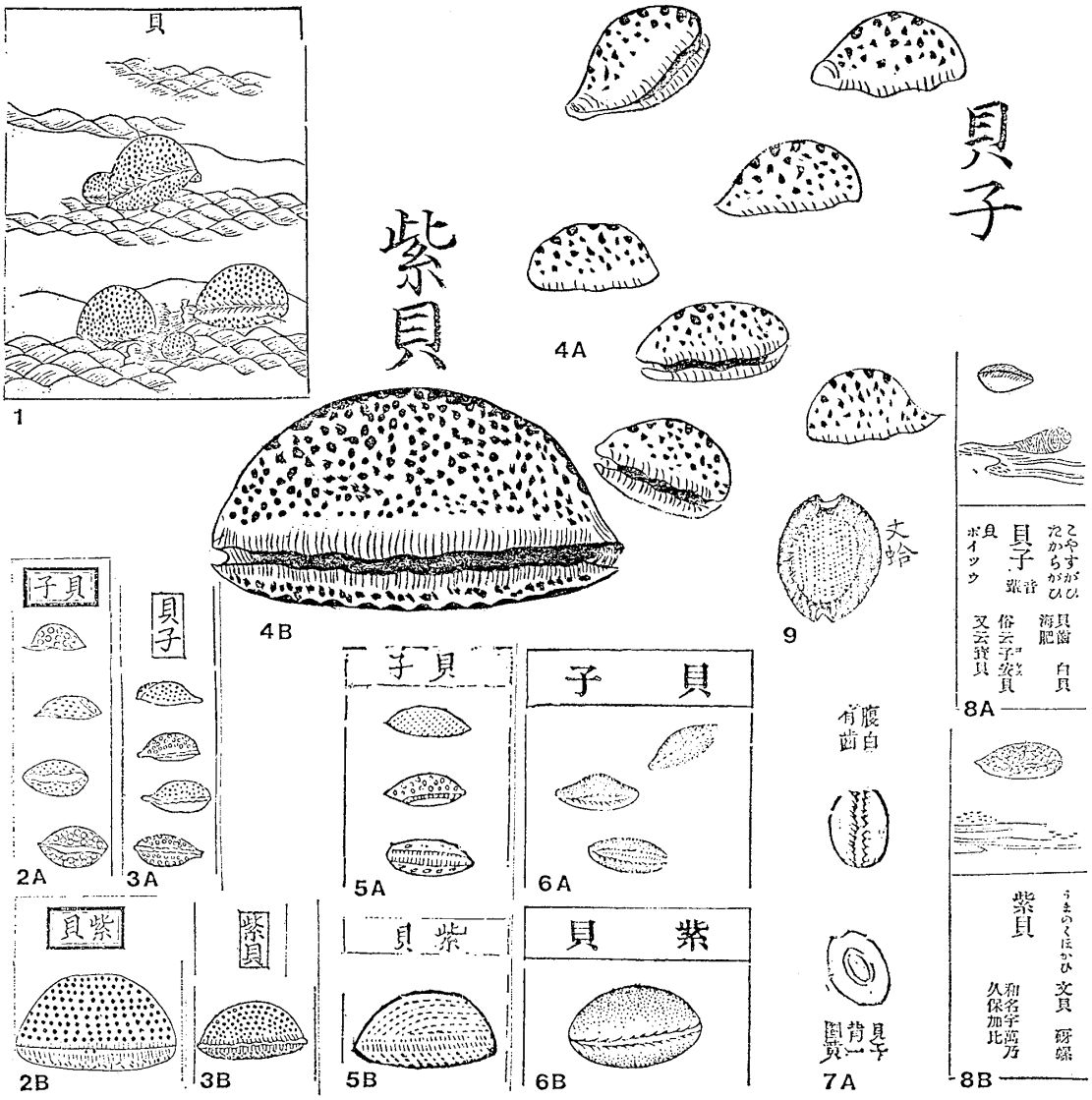

Fig. 1. "Bei", "Beizi", "Zibei" and "Wenge (文蛤)" in Old Chinese and Japanese Literatures

1, "Bei" in "San Cai Tu Hui (三才図会)"; 2, "Da Guan Ben Cao (大観本草)"; 3, "Zheng Huo Ben Cao (政和本草)"; 4, "Shao Xing Ben Cao (紹興本草)"; 5, "Ben Cao Gang Mu (本草綱目), Zin Ling Ben (金陵本)"[22]; 6, "Ben Cao Gang Mu, Zhang Kan Ben (張刊本)"[23]; 7, "Ben Cao Yuan Shi (本草原始)"; 8, "Wa Kan San Sai Dzu E (和漢三才図会)"[24]; 9, "Wenge" in "Ben Cao Hui Yan(本草彙言)"[25]. A, "Beizi"; B, "Zibei".

17) 李中立撰，"本草原始"，掃葉山房蔵板，巻7，34ウ，35オ．
18) 清黄宮綉纂，"本草求真"，上海科学技術出版社，上海，第1版第3次印刷，1979，p. 161.
19) a)武進謝観，"中国医学大辞典"，第2冊，商務印書館，香港，第1版第8次印刷，1963，p. 1371; b)同上，第3冊，p. 2681.
20) a)"中国薬学大辞典"，上，人民衛生出版社，北京，第1版，1956，p. 641; b)同上，下，p. 1195.
21) 明王圻纂輯，"三才図会"，巻6，13オ，ウ，明万暦35年刊本影印，成文出版社印行，1970，6，p. 2291.
22) "本草綱目附図"，上巻（金陵胡承竜刊本），春陽堂書店，東京，1979，p. 217.
23) "本草綱目附図"，下巻（合肥張紹棠刊本），春陽堂書店，東京，1979，p. 292.
24) a)寺島良安，"和漢三才図会"，巻47，介貝部，中外出版社，東京，1901，第2冊，p. 699; b)同上，p. 700.
25) 銭塘倪純宇先生選集，"絵図本草綱目彙言"，巻之十九図，2オ．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

一方，紫貝については，『新修本草』[7a] で「形似貝円大二三寸（中略）上紫斑而骨白」と説明し，以後の文献ではこれが引用されている．『本草衍義』[15b] では，「紫貝大二三寸，背上深紫有点但黒」と述べ，李時珍は『本草綱目』[5b] で，「按陸機詩疏云，紫貝質白如玉，紫点為文，皆行列相当，大者径一尺七八寸，交趾九真以為盃盤」と引用している．また，『本草求真』[18] では「紫貝即貝子色赤者也」とし，さらに詳しく「但与貝子相類甚多．如砺蠃之類皆能相混．分別用之．背上深紫有黒点者良．」と，類似種が多いことにふれている．

なお『新修本草』において「形似貝円大二三寸」とあり，ここで「紫貝」を「貝」と比較して述べられているが，この「貝」は単なる貝類全般のことではなくて，貝類中のある特定の種類，あるいは種類群を指すと考えられる．すなわち『三才図会』[21] によれば，「貝」は「貝出日南漲海中亦介虫也肉如科斗而有首尾以其背用故謂之貝」とあって「貝」の図が示され，さらに「紫貝」については「貝盈欠状如赤雷黒雲謂之紫貝」としている．

以上の文献に収載する貝，貝子および紫貝の図を Fig. 1 (1～7) に示した．

次に生態と分布に関しては，貝子は『名医別録』[12] で「生東海池沢」，『本草経集注』で「出南海」とあり，『図経本草』で「生東海池中今南海亦有之」としている．

一方，紫貝は『新修本草』で「出東海及南海」とし，『図経本草』では「南海北海皆有之採無時」としている．

すなわち，紫貝の説明に北海が含まれているが，ともに東海と南海をあげて，海中に産するとしている．

III. 薬　効

貝子の薬効については，『神農本草経』[3] で「主目瞖，鬼疰蠱毒，腹痛下血，五癃，利水道」と記載され，『名医別録』[12] では「除寒熱湿疰，解肌，散結熱」，『本草綱目』[5a] で李時珍は，「治鼻淵出膿血，下痢，男子陰瘡，解漏脯麺臛諸毒，射罔毒薬箭毒．」を追加した．現在はこれらをまとめて，『中薬大辞典』[6a] においては，貝子の功用主治として「清熱，利尿．治傷寒熱狂，水気浮腫，淋痛溺血，小便不通，鼻淵膿血，目瞖，痢疾」をあげている．

一方，紫貝の薬効は，初出の『新修本草』[7a] で「主明目去熱毒」と記載され，『本草綱目』[5b] では「小児痲疹目瞖」とした．しかし『本草求真』[18] においては，「功崙利水通道．逐蠱下血．凡人症患脚気．小児斑疹目瞖．五癃水腫．蠱毒鬼蛀．」とし，その理由を「用此的能解除．蓋因鹹有軟堅之力．脚症湿熱．用此得以透骨逐邪．貝骨堅硬．故能透骨」と説明している．さらに現在は『中薬大辞典』[6b] においてこれらをまとめて，功用主治を「清熱，平肝，安神，明目．治熱毒目瞖，小児斑疹入目，惇惕不眠」としている．

貝子および紫貝の薬効の変遷を Table II に示した．

IV. 日本の本草関係文献

日本の本草関係の文献においても，貝子および紫貝の両者をほぼ並列的に収載するものが多い．

まず貝子については，『本草和名』[26a] で「牟末乃都保加比」[27]，『多識編』[28a] で「多加良加伊」，『大和本草』[29a] で

Table II. Changes of Effects and Usages of "Beizi" and "Zibei"

書　名	貝　子	紫　貝
神農本草経	主目瞖，鬼疰蠱毒，腹痛下血，五癃利水道	
名医別録	除寒熱湿疰，解肌，散血熱	
本草経集注	焼作細屑末，以吹眼中，療瞖良	
新修本草		主明目去熱毒
千金翼方	主目瞖鬼疰蠱毒腹痛下血五癃，利水道除寒熱湿疰，解肌散結熱，焼用之良	主明目去熱毒
本草綱目	治鼻淵出膿血，下痢，男子陰瘡，解漏脯麺臛諸毒，射罔毒薬箭毒	
本草求真		功崙利水通道，逐蠱下血，凡人症患脚気，小児斑疹目瞖，五癃水腫，蠱毒鬼蛀
中薬大辞典	清熱，利尿 治傷寒熱狂，水気浮腫，淋痛溺血，小便不通，鼻淵膿血，目瞖痢疾	清熱，平肝，安神，明目 治熱毒目瞖，小児斑疹入目，惇惕不眠

26) a)深江輔仁，"本草和名"，下巻，24オ．新刊多識編，文化書房，東京，1973，p. 337; b)同上，下巻，20オ，p. 335.
27) 同書欄外に「按順抄都作久」とある．他は「牟末乃久保加比」となっているので，『本草和名』も正しくは「牟末乃久保加比」であろう．
28) 林羅山，"多識編"，巻4，28ウ，新刊多識編，文化書房，東京，1973，p. 222.
29) 貝原益軒，"大和本草"，巻14，介類，江戸岡田屋嘉七他，1709.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

「タカラガイ」,『和漢三才図会』[24a] および『物類品隲』[30] では「こやすがひ」と「たからがひ」,『用薬須知』[31] では,貝は「コヤスガイ」, 貝子は「和方中ノヤウカイ是ナリ」とあり, さらに貝歯は「即チ貝子一名歯子, 一名海蛇子, 和ニ子安貝ト云フ」とする.『増補手板発蒙』[32] でも「コヤスガヒ」として, さらに「品類多キモノナリ」とある.『本草綱目啓蒙』[33a] では, 貝子は「ムマノクボガイ(古名), タカラガヒ, コヤスガヒ, ハガヒ, マキガヒ, タラヒガヒ, 子コガヒ(筑前), チカラガヒ, ヤウガヒ(眼科書)」の名をあげて,「海辺ニ多シ, 大小アリ斉シカラズ」と述べている.

一方, 紫貝については,『和名類聚鈔』[34] で「和名宇万乃久保加比」,『本草和名』[26b] では「紫貝一名文貝, 和名牟末乃久保加比」とし,『和漢三才図会』[24b] で「紫貝, うまのくぼかひ, 文貝, 研螺, 和名宇万乃久保加比」とする. また『本草綱目啓蒙』[33b] では, 紫貝に「ヤクノマダラガヒ(和名鈔)[35], コヤスガヒ, 八丈ガヒ, ニシキガヒ」の名をあげて, 貝子との関係は,「大ナル者ハ長サ三四寸形ハ貝子ニ同ジ只背上中央聳ヘ隆ニシテ質更ニ光硬紙ヲ研ルニ堪ユ質ハ黒クシテ円白章明ナリ」と説明している. さらに『物類品隲』[30] では紫貝は「即チ貝子ト一類別種ナリ」としている.

貝子および紫貝にあてた貝の和名を Table III に示した. また図を Fig. I (8) に示した.

V. 考 察

1. 名称について

貝子は『図経本草』に「貝類之最小者」, あるいは,『本草綱目』に「小白貝也, 大如拇指, 頂長寸許」とあるように, 小型の貝をさしている. また貝歯は『図経本草』に「潔白如魚歯故一名貝歯」とあって, 貝殻が魚類の歯のように白色であることを示すが, また『本草原始』では「貝腹下潔白, 両開相向如魚歯故一名貝歯」とあり, ここでいう魚歯は色(潔白)ではなく, 形(タカラガイ類の歯)に由来する.

一方, 紫貝は『新修本草』で「形似貝…上紫斑而骨白」,『本草衍義』で「紫貝大二三寸, 背上深紫有点但黒」とあるように, 色斑に由来する. また別名の研螺は『本草綱目』[5b] に「画家用以研物故名」とあり, 物を研るのに用いることから来た名称である.

2. 形態について

李時珍が貝子について述べた「背腹皆白, 諸貝皆背隆如亀背, 腹下両開相向, 有歯刻如魚歯, 其中肉如蝸蚪, 而有首尾」は, 貝殻の背が隆起してふくらみ, 殻の底面は内唇と外唇が肥厚して, 殻口はその間にあって溝状となり, 内・外唇に歯が並んで相対するタカラガイ類の形態を示している. さらにタカラガイ類は, 生息時は殻口より外套膜

Table III. Names of "Beizi" and "Zibei" in Japanese Literatures

書 名	貝 子	紫 貝
和名類聚鈔		宇万乃久保加比
本草和名	牟末乃都保加比	牟末乃久保加比
多識編	多加良加比	
大和本草	タカラガイ	
和漢三才図会	こやすがひ, たからがひ	うまのくぼかひ, 宇万乃久保加比
物類品隲	タカラガヒ, コヤスガヒ	
用薬須知	コヤスガイ, ヤウカイ	
増補手板発蒙	コヤスガヒ	
本草綱目啓蒙	ムマノクボガイ, タカラガヒ, コヤスガヒ, ハガヒ, マキガヒ, タラヒガヒ, 子コガヒ, チカラガヒ, ヤウカヒ	ヤクノマダラガヒ, コヤスガヒ, 八丈ガヒ, ニシキガヒ

30) 平賀源内, 杉本つとむ解説, "物類品隲", 巻4, 介部, 八坂書房, 東京, 1972, p. 89.
31) 松岡玄達, 難波恒雄編集, "用薬須知", 漢方文献刊行会, 大阪, 1972, 巻4, 19ウ, p. 186; 後編, 巻3, 6オ, p. 361; 続編, 巻2, 18ウ, p. 694.
32) 大阪屋四郎兵衛原著, 難波恒雄編集, "増補手板発蒙", 大阪漢方医学研究所, 箕面, 1980, p. 57.
33) a)小野蘭山, 杉本つとむ編著, "本草綱目啓蒙", 巻42, 20オ, 早稲田大学出版部, 東京, 1974, p. 675; b)同上, 巻42, 21オ, p. 675.
34) 源順, "和名類聚鈔", 巻19, 11ウ, 大阪渋川清右衛門版, 1667.
35) 和名鈔でヤクノマダラガヒというのは錦貝のことで,「夜久乃斑貝」とある. 同書で紫貝はその直前にあって「宇万乃久保加比」という.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Society of Pharmacognosy

を出して殻背全面を覆い，頭部と尾部の別がある．従って動物体もよく描写されている．紫貝も貝子と大小を比較して記述されることから，同じ形態の貝類である．故に貝子と紫貝はタカラガイ科 Cypraeidae，あるいはそれに類似した貝殻を有するウミウサギガイ科 Ovulidae，ザクロガイ科 Eratoidae およびシラタマガイ科 Triviidae などのタカラガイ超科 Superfamily Cypraecea に属する貝類であると判断できる．

次に殻の大小により，小型のものを貝子，大型のものを紫貝とする．貝子は「小白貝」であり，「大如拇指，頂長寸許」は小型の貝で白色である．タカラガイ類は一般に種類によって大きさがほぼ定まり，殻表にはそれぞれ特徴的な色彩と斑紋がみられるが，本来白色のものは甚だ少ない．殻長が 25 mm 前後でほぼ白色と考えられるものは，ハナビラダカラとキイロダカラである．この両種はよく似た外形を示し，殻の底面も多くは白色で，内・外唇の歯はそろった大きさで顕著である．さらに『本草原始』に収載する図は，殻表に環紋を明記し「背一圈黄」と付記されているのはハナビラダカラである．腹面の図およびその付記の「腹白有歯」も正しい．

紫貝は『新修本草』の「形似貝円大二三寸…上紫斑而骨白」，あるいは『本草綱目』の「紫貝質白如玉，紫点為文」は，白色の地に紫色の斑点があることを示している．また大きさも二三寸で，画家が研るのに握りやすい大きさと殻背のふくらみ方を考えると，殻長 7～8 cm くらいのホシダカラがこれに該当する．さらに紫貝としてあげられた図の多くはホシダカラを描いたものと推定される．

なお『絵図本草綱目彙言』[25] に文蛤として収載する図 (Fig. I-9) がある．この図は文蛤に相当する *Meretrix*[36] あるいは *Cyclina*[36] とはまったく異なり，殻表からみた殻口の上下の切込み，内唇と外唇の周縁部の外形と色調，殻背の形と模様などから判断すると，これはまぎれもなくハナマルユキ（タカラガイ科）を描写したものである．

3. 分布について

貝子と紫貝は，東海および南海に生ずるとするが，中国大陸の東岸，南岸ともにタカラガイ類が生息しており，特に南の暖海に多産する[37]ことから首肯できる．また北海とあるのも，黄海から朝鮮半島にかけてもハナビラダカラやハナマルユキなどが分布する[38]ので，事実に相違しない．

4. 種類について

貝子および紫貝に関する日本の文献も，「牟末乃久保加比」，「宇万乃久保加比」などとし，後に「多加良加比」，「こやすがひ」として，タカラガイ類をあげている．これらは現代の分類上の種類までを確実に示す名称ではないが，タカラガイ科の貝であることは明らかである．

以上考察した結果，貝子として

キイロダカラ *Monetaria* (*Monetaria*) *moneta* (L.)[37]

ハナビラダカラ *M.* (*Ornamentaria*) *annulus* (L.)[37]

紫貝として

ホシダカラ *Cypraea tigris* L.[37]

以上の 3 種が，文献記載文および附図から認定することができた．

タカラガイ類は甚だ種類が多いものであるが，『本草求真』において，紫貝に関して「但与貝子相類甚多，如砑嬴之類皆能相混，分別用之」とあるように，貝子と紫貝は，他の類似の種から識別する必要があることを説いている．従って南海に産するタカラガイ類であれば，何でも用いていたということではないようである．

5. 薬効について

貝子は『神農本草経』で「主目瞥，鬼疰蠱毒，腹痛下血，五癃，利水道」をあげ，これに「除寒熱湿疰」あるいは「治鼻淵出膿血」などが追加されて，『本草綱目』まではこのような薬効をもつとされてきた．

一方の紫貝は，初出の『新修本草』で『主明目去熱毒』をあげ，後に「小児癍疹目瞥」が追加されたくらいで，『本草綱目』までは主として目の治療に用いられた．すなわち明代までは貝子と紫貝はその使用が区別されていた．

しかし清代の『本草求真』において，紫貝の薬効に『神農本草経』にいう貝子の主治を記し，この頃から貝子と紫貝の用法に差がみられなくなった．現在，白貝歯および紫貝歯として，あるいは単に貝歯として用いられるのは，この踏襲であろう．

---

36) 浜田善利，古賀朋子，村上誠慤，薬史，**14**(2)，53(1979).
37) 張璽，斉鍾彦等編著，“中国経済動物誌”，海産軟体動物，科学出版社，北京，第 1 版第 1 次印刷，1962，p. 37.
38) 柳鍾生著，“原色韓国貝類図鑑”，一志社，ソウル，1976，pl. 10，p. 64.

NII-Electronic Library Service